歴史の循環にみる 平和と力の均衡

技術経営士の会
(一財) 情報通信振興会 理事長
寺﨑　明

平和は理想の産物なのか、それとも力の均衡が生み出す一時的な静寂なのか。
歴史の循環の中で、日本という国の立ち位置を考える。

人類の歴史を長い時間の流れの中で眺めていると、ある種の循環が浮かび上がってくる。戦争が起こり、多くの命が失われ、街や国が廃墟と化す。その痛ましい経験の直後、人々は「二度と繰り返さない」と誓い、国境を越えた平和の仕組みを築こうとする。国際機関や条約、同盟といった制度は、いつも深い反省の中から生まれてきた。

復興と協調は経済を動かし、社会に活力を与える。世界はしばらくの間、安定と繁栄の季節を迎える。

だが、その安定が長く続くほど、国家体制を問わず、国内では別の亀裂が静かに広がっていく。貧富の差、価値観の対立、政治への不信。人々の関心は外よりも内へと向かい、政権は自国の整備に追われるようになる。国際的な調整は後景に退き、その過程で、政権を守るため、国民の批判の目を逸らせようと他国の意図的な批判などが奇想されたりもする。こういったずれが、やがて国と国との摩擦へと変わっていく。

この構図は、まるで歴史そのものの性（さが）を映しているかのようだ。

考えてみれば、縄張りをめぐる争いは動物の世界では珍しいものではない。人間もまた、その延長線上に生きている存在なのかもしれない。ただ一つ異なるのは、人類が自らを滅ぼしかねない力――核兵器――を手にしてしまったことだ。

その破壊力はあまりにも大きく、使うこと自体が現実的な選択肢から遠ざけられている。皮肉なことに、その「使えなさ」こそが、大国同士の戦争を思いとどまらせてきた側面もある。

恐怖が、理性の代わりに平和を支えている。そんな不安定な均衡の上に、現代の国際秩序は成り立っているようにも見える。
では、日本という国は、その中でどこに立っているのだろうか。

日本は、広島と長崎で原子爆弾の惨禍を経験した唯一の国である。その記憶は、核兵器は決して使われてはならないという強い倫理的訴えとして、今も語り継がれている。一方で、日本の安全保障は、同盟国の抑止力、いわゆる「核の傘」に支えられてきた現実もある。理想と現実のあいだで、日本は長く揺れ続けてきた。

外交とは本来、言葉と信頼の技術である。

しかし、現実の世界は、それだけで動くほど単純ではない。言葉の背後に、どのような力があるのか。信頼は、何によって裏打ちされるのか。戦力や経済力という背景を欠いた外交は、危機の瞬間にも通用し続けるのだろうか。

私は、そこに明確な答えを持っているわけではない。

ただ、歴史が示してきたのは、理想だけでも、力だけでも、平和は長く続かないという事実であるように思える。人間は、恐怖と希望のあいだを行き来しながら、均衡を探し続ける存在なのだろう。

問いを立て続けること。それ自体が、私たちに残された、ささやかながらも確かな責務なのかもしれない。

循環する歴史という列車の走行音に包まれながら、私たちは今日も、次の分岐点を静かに見つめている。